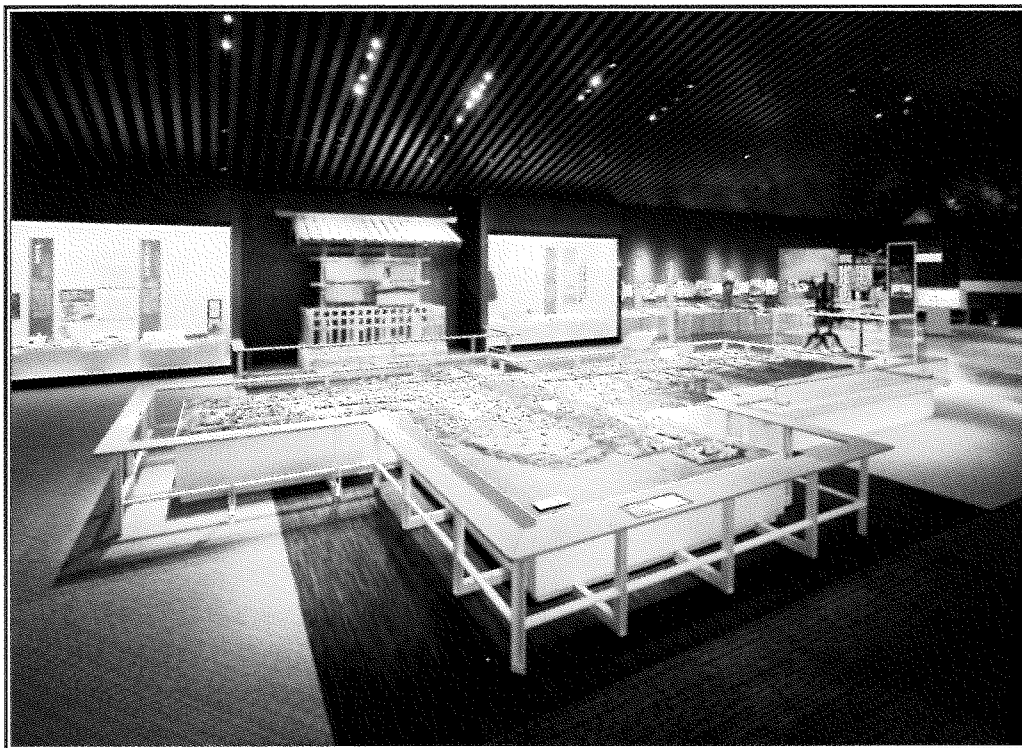


# あるむぜお111

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 111

2015年3月20日



新展示「宿場のにぎわい」コーナー

## 目次

- 1-2 常設展示室リニューアル！  
④「宿場のにぎわい」
- 3 展示会案内  
企画展 府中のゴシュウギーむかしの結婚式ー
- 4-5 ノート 「八講」の墨書土器をめぐって
- 6 多摩川あさかな考  
④春を呼ぶマルタウグイ
- 7 最近の発掘調査  
再び出土した「神」の墨書土器
- 8 連載 天文・宇宙の最新動向  
⑧金星探査機「あかつき」金星軌道投入！

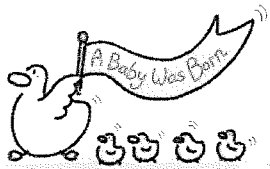
## 常設展示室リニューアル！

去る10月4日、本館2階の常設展示室がリニューアルオープンしました。前号に引き続き、今号では完成した常設展示室の見どころを紹介합니다。

## ④「宿場のにぎわい」

江戸時代の府中は、<sup>こうしゅうかいどう</sup>甲州街道の<sup>しゆくばまち</sup>宿場町となり、地域の中心地としてにぎわいました。このコーナーでは、徳川家康が築いたとされる府中<sup>ごてん</sup>御殿や宿場に関する資料を中心に展示を構成しています。また、現在も市内に残る高札場の江戸時代の姿を再現し、臨場感を創出しました。





# リニューアルの見どころ！

## ④「宿場のにぎわい」

今回は、〈府中らしさ〉をあらわす3本柱「くらやみ祭」「古代国府」「近世府中宿」のうち、「近世府中宿」を扱ったコーナーの見どころについてご紹介したいと思います。

「宿場のにぎわい」と題するこのコーナーは、「府中御殿」に関する資料で始まります。御殿とは、戦国期から江戸時代初期に大名が領地の中に設けた宿泊施設のことですが、現在知られているのは、ほとんどが徳川氏のもです。これらは、江戸時代の半ばにはなくなってしまったため、その実態はよくわかっていません。

「府中御殿」は、小田原北条氏が滅亡して関東が徳川家康の領地となった天正18年（1590）、奥州平定に向かった豊臣秀吉の帰路の宿舎として家康が造らせたと伝えられるものです。江戸時代の資料によれば、御殿が置かれたのは六所宮（現 大國魂神社）の西側で、現在のJR府中本町駅東側のハケ（府中崖線）上にあたります。この辺りは、旧名を字御殿地といい、古代には国司や国造の屋敷があったと伝えられていた場所です。

府中御殿の伝承が史実として立証されたのは、この場所の発掘調査で徳川氏の家紋の三葉葵が取り入れられた鬼瓦が出土したことによります。この際、府中御殿で使用していたと思われる釘や陶器なども見つかりました。

リニューアルでは新たな成果として、これらの資料を展示しています。ご来館の際はどうぞじっくり観察してください。釘に付着した木片に僅かながら朱色が残っているのに気付くと思います。また鬼瓦は、御殿が正保3年（1646）の大火で焼失したと伝えられていることを裏付けるように、炎で焙られて赤く変色しているのがわかります。焼失の後、府中御殿は再建されなかったことから、この鬼瓦はその最期の姿を今に伝えているものと言えるかもしれません。

御殿を築く場所として府中が選ばれたのは、古代に国府が置かれた場所だという由緒に加え、交通の要衝だったからだと考えられます。御殿

がなくなった後もそれは変わることなく、江戸時代の府中は人や物資の流通の拠点である宿場町として発展していきます。六所宮を有する門前町としてもにぎわい、甲州街道の両側には、旅籠屋やさまざまな店が軒を連ねていました。

その府中宿の町並を1/200で再現した模型は開館当時から展示してありますが、今回のリニューアルでは、この模型に府中御殿跡地を含めた260m×486mのエリアを増設しました。府中御殿があった場所は、万延元年（1860）頃六所宮禰宜の織田兵部によって観光地として整備されました。当時は庶民の間で旧跡を巡ることが流行っていたため、六所宮などと併せてこの場所を旧跡として宣伝したのです。多摩丘陵や多摩川を見渡せるロケーションの良い場所に見晴らし台が築かれ、近くに休憩できる場所もつくられました。そこでは、酒宴や歌会などが開かれたといえます。

模型では当時刊行された鳥瞰図をもとに、見晴らし台に登る人々や、近くで踊る男女などを再現しています。記録によると、六所宮の本殿の裏から御殿跡に向かう道が新たにできたようですので、そのルートも推定してつくりました。模型の傍らには甲府代官の手代らが府中宿を観光する映像があります。みなさんも模型と照らしあわせながら彼らと一緒に府中宿を歩き、御殿跡地に行くルートを探してみてください。（花木知子）



観光地となった府中御殿跡（部分） 本館寄託資料



## 企画展

## 府中のゴシュウギ—むかしの結婚式—

4/11（土）～6/28（日）

会場：本館 2 階企画展示室

観覧無料

ホテルや教会、神社、結婚式場などを会場とした結婚式が一般的になったのは、昭和 30 年代以降のことと言われています。それ以前にはおもに自宅を会場とした結婚式が行われていました。

府中では結婚式を「ゴシュウギ」と呼んでいたようです。そして親戚や地域の方々など、多くの人たちの協力を得て行われるものでした。土地ごとの流儀もあり、結婚式を見物した、協力したという思い出話もよく耳にします。家の行事ではありましたが、ゴシュウギは地域の一大イベントであったとも言えるでしょう。

現在、ゴシュウギを昔ながらの形式で行うことはなくなってしまったようです。しかし、経験者の記憶とともに、写真や使用された道具類が残されており、大正～昭和初期に行われていたゴシュウギの様子を、断片的ではありますがうかがい知ることができます。

多くの場合、現在よく見られるようなウェディングドレスはほぼ登場せず、和装が主流でした。そして、地域や家によって差はありますが、仲人、親戚、調理などで加勢する近所の人たち、式の補助をする男蝶、女蝶と呼ばれる子供たちなど、多くの協力者とともに行われました。

現在では少なくなった、嫁入り道具の新調、そして披露も行われていました。近年、博物館では 1953 年（昭和 28）に結婚された方から、婚礼に使用した衣装および写真をご寄贈いただきました。このお宅では、その時の嫁入り道具を現在でも大切に使用されています。

地区によっては、共同で使用する道具もありました。ゴシュウギのような多くの人が集まる際、食事ですう膳椀類を共同で所有していました。膳



座敷で行われていた「ゴシュウギ」  
1922 年（大正 11）

椀類に加え、三三九度用の盃や湯桶、飯台など、会食以外の場面で使われる道具が備えられていることもありました。

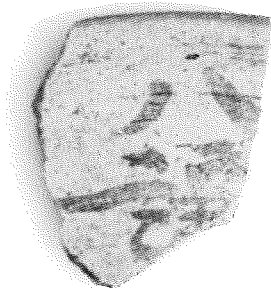
それ以外にも、ゴシュウギに際しては多彩な道具が登場します。博物館にはゴシュウギ前の結納目録から、長持・筆筒、鏡台、張板などの嫁入り道具まで、結婚にかかわる資料が数多く残されています。

今回の展示会では、おもに大正～昭和期のゴシュウギに関連する資料を通して、むかしの府中における結婚式の衣装や道具類、そしてそれにまつわる風習について紹介します。

むかしの結婚式を知ることから、府中の文化を再発見していただければ幸いです。

（佐藤智敬）





「八講」の文字が墨書きされた土器

## ▼ はじめに

奈良・平安時代の遺跡からは、時折、文字が書かれた資料が出土します。その代表格は、木簡や漆紙文書といってよいでしょう。木簡は荷札などとして用いられた短冊形の木片、漆紙文書は紙の文書に漆が浸み込んだために腐らずに残ったものです。これらは情報量が豊かなため、古代社会の解明に大きな役割を果たしていますが、どちらもめったに出土するものではありません。

これらに対して、一般の集落跡からも少なくない数が出土するのが、墨で文字が書かれた土器です。武蔵国府関連遺跡は地方行政府である国府を内包していることもあって、こうした墨書土器がこれまでに1,600点以上出土しています。木簡や漆紙文書に比べて、いかに数多く出土しているかがわかんと思います。

もっとも、こうした墨書土器の多くは1文字しか書かれていないのが普通で、何を意味するのか判断しがたいものがほとんどです。出土数は多いものの、それが持つ情報量は限られているといっ

てよいでしょう。小文ではそうした墨書土器の一つにスポットをあててみたいと思います。もちろんそれは、興味深い文字が書かれているからにほかなりません。寿町1丁目にある府中消防署の建て替えに伴い、2007年度に行われた発掘調査によって出土した、「八講」の墨書土器がそれです。わずか2文字ですが、そこから読み取れる古代世界の一端を紹介したいと思います。

## ▼ 「八講」とは何か？

「八講」が何を指すのかわかる人は、お坊さんか、仏教史研究者など僅かかもしれません。しかし、「八講」は古代以降のさまざまな史料に、「法華八講」の略称として見出すことができます。まずは、この「法華八講」が何かということから、始めてみましょう。

## 歴史辞典を紐解くと

仏教法会の一つ。『法華經』八巻を講説する。多くの場合、八巻を朝・夕2座に分けて4日間かけて行われる。平安時代には、南都や天台の寺院で故人の周忌法会として定着。さらに、貴族社会にも広まり、周忌法会のみならず、現世利益や後世菩提などさまざまな目的で盛んに行われるようになった。

といった解説がなされています。

この説明から法会の具体像を知ることとはできませんが、平安時代中期以降になると、法華八講は『枕草子』や『栄花物語』をはじめとする古典文学、『小右記』や『御堂関白記』といった貴族の日記にもかなりの頻度で取り上げられています。それらをみると、数十人に及ぶ僧侶が参会する大規模なものであること、講師を務めた僧侶の説法の神妙さに主催者や参会者が感嘆した記述も見出せ、まさに経典の解釈を論じる宗教儀礼であったことがわかります。

その一方、この法会は、主催者の権勢を誇示するという側面も併せ持っていたと考えられています。多くの僧侶が招聘されて盛大に催されてい



て、とりわけ第五巻を講じる日には、参会者らが贅を尽くした仏への捧げ物を携えて本尊や堂塔の周囲を巡る儀式が行われているのです。日記類に書き留められた捧げ物をまとめると、砂金を収めた瑠璃（ガラス）の壺、香木、香炉、数珠、袈裟、袴、染料、紙、墨、綾、絹など実に多彩で、参会者はその華やかさを競っているようです。この日こそ、法会のクライマックスでした。

文献史料からうかがえる法華八講は、以上のように絢爛豪華なそして盛大な法会であり、貴族社会を象徴する催事でもあったのでした。

### ▼「八講」墨書土器とその出土地点

ここで、出土した墨書土器へ目を移してみましよう。

「八講」の2文字が墨書された土器は、杯形をした須恵器の破片です。小さな破片のため、形態的な特徴から土器がつくられた年代を絞り込むには躊躇せざるを得ませんが、還元されず酸化炎焼成で留まっていることも踏まえれば、おおむね10世紀代のものと考えてよいでしょう。「八講」の文字は、こうした土器の外面に縦書きされています。墨色は鮮やかで、「講」の文字の一部が失われているとはいえ、「八講」と判読する点に疑義をさしはさむ余地はないと思います。

出土地は先述の通りですが、古代には武蔵国府の中核であった官庁街の北方約500mの地点にあたり、周囲は多くの人々が集住するマチが広がっていました。「八講」の墨書土器はそうした地点の、いわゆる遺物包含層から出土していて、竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの遺構から出土したものではありません。また、隣接する発掘調査区も含め、仏堂や仏塔といった建物跡の検出はありませんし、仏教に関係する遺物の出土もみられません。

### ▼国府と法華八講

このように、出土地付近には今のところ仏教的な様相は感じられませんが、「八講」墨書土器が出土したことは紛れもない事実です。仏教法会には酒食を振舞う饗宴が付きものでしたから、そうした際に「八講」の文字は食器である土器に記されたのかもしれませんが。出土地点やその周辺であったかどうかはともかく、武蔵国府のマチのど

こかで、法華八講が執行されたのです。

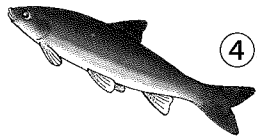
ところで、先にみた法会の具体像は、都とその周辺を舞台としたものをもとにしています。古代において、地方で法華八講が行われた実例は、文献史料からはうかがえないようです。したがって、府中で出土した「八講」の墨書土器は、地方においても法華八講が行われていたことを示す稀有の資料と評価できます。

10世紀は、地方に赴任した筆頭国司が税物納入をはじめとする国務の全権を握っていく時代です。彼らは受領と呼ばれ、強力な地域支配と徴税を実現し、国家財政を支える一方で、私富も蓄えたのでした。こうした社会背景を踏まえれば、国府において法華八講を行い得たのは受領もしくはそれに連なる人びとであったと考えたいところです。都ほど華やかではなかったとしても、それなりに豪華な捧げ物もあったのではないのでしょうか。

また、法会を直接司った僧侶に関しては、国府のマチの北方にある国分寺僧が真っ先に浮かびます。もちろん、国分寺以外の周辺の寺院からも僧侶たちは参集したことでしょう。それにしても、法華八講の開催は、高い学識を持つ大勢の僧侶たちの存在なくしては叶わなかったはずです。「八講」の墨書土器の出土は、そうした僧侶たちの存在をも浮かび上がらせてくれたといっ

てよいでしょう。それにしても、法華八講はいったい国府のマチのどこで行われたのでしょうか。貴族の日記などをみると、寺院ばかりか、主催者の私邸でも行われていますので、受領の私邸も視野に入れる必要があるようです。しかし、墨書土器は使用場所から離れて廃棄されることも十分に想定されます。法会の開催場所を特定することは、至難の業といえます。多くの僧侶を集めた盛大な法会が、都から遠く離れた武蔵国府の地で行われていた、この事実が明らかになっただけでも大きな成果なので、あまり欲張らずにおきましょう。

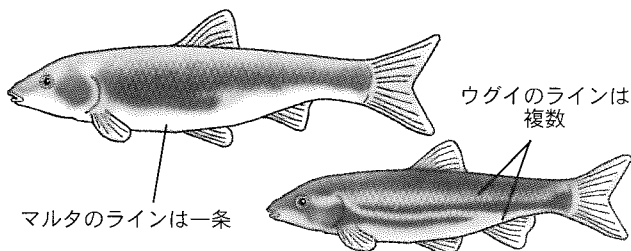




## ④春を呼ぶマルタウグイ

春の到来とともに、多摩川にも活気が戻って来ます。春は河原に咲く様々な植物、これに集まる昆虫など、気温が上がるに連れ生物活動が活発になる季節です。水中でも魚が機敏に動き、夏に向けて躍動感を示し始めます。そんな折、春一番に海から帰って来る魚がいます。前号で紹介した落ちアユが成長して、多摩川に戻って来るのはもう少し先の話ですが、多摩川を代表する魚で春に丸太のような紡錘形の体で川面を賑わすもう一種類の魚、マルタウグイです。

マルタウグイは、その名の通りウグイの仲間、特にその体つきから通称マルタと呼ばれています。ウグイの体長は成魚で30cm前後、マルタの方が40～60cmと大きいのですが、基本的にはウグイと形態が似ています。マルタは3月中旬あたりから多摩川を上る姿が確認され始めますが、これは産卵のための遡上であり、この時点で体の側面に婚姻色としてオレンジのラインが入っています。ウグイも婚姻色を発しますが、ラインが数本に及びます。マルタの婚姻色ラインは一条のみで、さらに追星が頭を中心に全身に出るので、この時期には見分けやすいといえるでしょう。ウグイとマルタは交雑し易く、産卵場で両種が絡み合うこともしばしばです。



マルタは生涯のほとんどを海で過ごします。多摩川に戻るのは産卵期に当たる3月中旬から4月中旬の1か月間で、桜の頃の流れの緩やかな瀬で卵を産みます。マルタの祖先は淡水魚なので、産卵だけは海水中では不可能なのです。ウグイもマルタと同じで緩い瀬に産卵しますが、この

仲間が何故わざわざ流れのある瀬を産卵場所を選ぶのかという疑問もあります。その理由としては、産んだ卵が他の魚に食べられない、流速が速く産卵床である石間を伏流する流れが酸素を十分に供給する、孵化した仔魚がいち早く流下できるなどが考えられています。

孵化したマルタの仔魚は体長40mm前後までは川で育ちますが、その後は下流に降り、若魚は海水の混じる汽水域をテリトリーとして、そこに生息するゴカイや貝類を食べて生活します。同じ降海型でも、アユが秋から春の間だけ海で過ごすとは生活史の中の時間配分が異なるのです。また同属のウグイでは、一部成長途中で海を目指すものがありますが、孵化した仔魚が海に降ることはありません。マルタは降海型魚種の中では、海水に依存する部分が大きいと言えるでしょう。それでも多摩川の春を象徴する魚と思えるのは、遡上途中で堰を飛び越えんばかりに図体を跳ね躍らせたり、水しぶきを上げたりする様子から、マルタの帰還が夏に向けた生物活動のスタートにも感じられるからだと思います。

70年代の高度成長期には、やはりアユ同様、水質汚濁による環境悪化で多摩川から姿を消したマルタですが、その後水中環境は再生され、放流なども行いながら90年代半ばにはついに復活を遂げました。産卵群は、河口から18kmの二子橋付近から22kmの宿河原堰までが最も多く見られるようです。当初は河口から約28kmの多摩川原橋から稲城大橋の間が遡上の上限と言われていましたが、堰の改修や魚道整備が進み、現在は当館近くの大丸堰周辺までマルタの姿が確認されています。

近年、多摩川流域では毎秋に台風や豪雨による水位の上昇が起こっていますが、皮肉にも川を下るマルタにとっては好条件です。反面、本来上流にいる魚も下流へと流されるので、生態系には影響を及ぼします。常に化する多摩川環境ですが、マルタやアユが代表種として再び定着することを願うばかりです。



# 再び出土した「神」の墨書土器

寿町三丁目 府中市ふるさと文化財課 野田 憲一郎



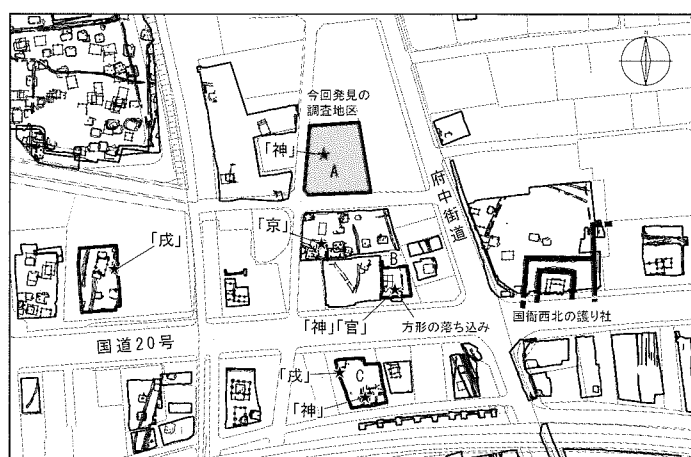
「神」の墨書土器

本誌 50 号と 57 号で、武蔵国衙西北（戌亥）の護り社と推定される遺構（以下「社」）と、その西側から出土した「神」「戌」の文字が記された墨書土器について紹介しましたが、最近、その付近から再び「神」と記された墨書土器 1 点が発見されたので紹介します。

今回出土した場所は、<sup>ことひさちやう</sup>寿町 3 丁目にある調査地区（A）で、社の北西約 110 m に位置します。この墨書土器は、須恵器<sup>すゑき</sup>の底部外面に大変整った字で「神」の一字が書かれたもので、平安時代の<sup>からなるもの</sup>竪穴建物跡から出土しました。年代は 9 世紀前半と見られますが、出土した竪穴建物跡の時期はもう少し時代が下るため、この竪穴建物に後から混入したものと考えられます。

これまでにこの付近で見つかった「神」と記された墨書土器は、社の西約 70 m（B）と、南西約 100 m（C）で各 1 点ずつ出土しており、どちらも同じく須恵器<sup>すゑき</sup>の底部外面に「神」の一字が記されています。これら 3 点の墨書土器は、つくりの部分の「申」の右下に点を打っているという点や、年代が B は 8 世紀末～9 世紀初頭、A・C は 9 世紀前半と、すべてが平安時代前期に製作されているという点で共通しています。この時期は社の存続時期とほぼ重なるため、これらの土器は、社でのみ使用する器として「神」の一字が記されたと見て良いでしょう。

今回の発掘現場を含む社の西側付近では、社に関連した「神」「戌」と記された墨書土器の他に、「官」「京」といった<sup>かんけい</sup>官衙的な墨書土器も出土しています。また、B の調査地区では、完形の土器や<sup>れき</sup>礎が多量に出土した大型の方形<sup>ほうけい</sup>の落ち込みが 2 基見つかるなど、社の存続時期に重なる特殊な遺構・遺物が見つかっています。おそらく社の西側一帯では、社の管理や祭祀<sup>さいし</sup>的な行為が行われ、それに携<sup>たずさ</sup>わる役人が存在し、これらの墨書土器を使用していたのではないのでしょうか。今後も社に関わる遺構・遺物の発見が注目されます。







連載

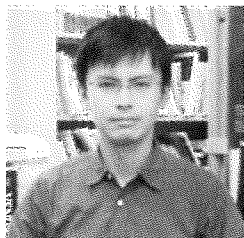
## 天文・宇宙の最新動向



## ⑧金星探査機「あかつき」金星軌道投入！

インタビュー：本間隆幸

最終回となる今回は、金星軌道再投入を年末に控えた金星探査機「あかつき」について、プロジェクトサイエンティストの今村剛さんにお伺いします。



## Q.「あかつき」の目的は？

「あかつき」というのは、金星へ行く探査機です。金星は、太陽が西の空に沈んだ後で明るく輝く「宵の明星」、あるいは明け方東の空に見える「明けの明星」などとして、よく知られている星です。その実態は科学的に非常に面白く、とても厚い硫酸の雲に覆われ、濃厚な二酸化炭素の大気があり、地球ではありえないような暴風がいつでも同じ方向に吹き続けています。

「あかつき」の観測は、金星の環境が地球とどう違ってどのような気象の仕組みに支配されているのか、それが金星の環境を作り上げるのにどういう役割を果たしているのか、などを理解することを目的としています。金星の不思議な気象の謎を解く、金星版の気象衛星「ひまわり」みたいなものです。

## Q.「あかつき」の今にいたる経緯は？

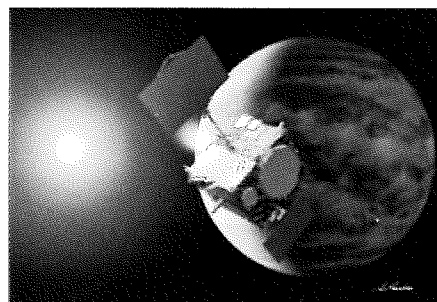
このプロジェクトは2000年頃スタートしました。それから10年近くかけて設計と探査機の製作などが行われ、打上げは2010年の5月でした。その後半年を経た同年の12月に金星の近くまで行き、逆噴射を行いました。これは「あかつき」のスピードを少し緩めて金星の引力に捉えさせ、その人工衛星とするためです。ところがエンジントラブルが起きて、うまく逆噴射ができず、そのまま金星を通り過ぎてしまいました。その結果「あかつき」は、金星に何度か近づきながら、人工惑星として太陽の周りを回っているのです。

## Q.「あかつき」の今後の計画は？

普通ならばそこでミッションとしては終了してしまいましたが、調査してみると、メインエン

ジンは壊れているものの、衛星の向きを変えるためのエンジン（スラスタ）はまだ使え、燃料もかなり残っていることがわかりました。そこで、残された燃料とスラスタを使って、もう一度金星の周回軌道へ入るチャレンジをしようということになりました。

このまま普通に飛んでいても金星にはたどり着けませんので、2011年11月に軌道修正を行いました。スラスタは姿勢を変えるためのエンジンですから、通常は短時間しか使いませんが、それを長時間噴射して「あかつき」の向きを変えました。それが成功し、2015年の暮れに金星に到達するような軌道に上手く乗せることができたのです。



「あかつき」と金星

この後何回かの軌道修正を行い、最終的には2015年12月の初め頃に再び金星に接近し、そこで改めて逆噴射をして、金星の人工衛星にする予定です。それが成功したら、金星の観測を始めることができます。

## Q.観測で何を一番期待していますか？

一番注目しているのは、金星の「スーパーローテーション」です。これは、地球と比べてかなり遅い自転スピード（金星の1日は地球の243日）の金星において、時速400kmにもなる風が吹く現象のことで、金星の大きな謎のひとつとされています。これを詳しく観測し理解すれば、地球や他の惑星、さらには系外惑星の大気を考察する上で、大きなステップなると考えています。

みなさんもこの「あかつき」のプロジェクトがうまくいくように応援してください。

今村 剛 IMAMURA Takeshi JAXA 准教授

略歴：1998年東京大学大学院博士課程修了。

同年よりJAXA宇宙科学研究所に勤務。専門は惑星大気。金星探査機「あかつき」の科学主任。